
俺にメガミは微笑まない

望月光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺にメガミは微笑まない

【Nコード】

N4316R

【作者名】

望月光希

【あらすじ】

「どうすれば死ねますか？」

彼女をいじめによる自殺で失った少年、木枯虚羽は自暴自棄に陥っていた。そして標的は変わり、虚羽自身も、学園にはびこるいじめの対象とされていた……。

そんな虚羽に訪れた幸せ。

それは、いじめの包囲網の頂点に君臨していた少女……鈴森みゆの

唐突な告白だった。

いじめられっ子といじめっ子……二人の恋の行方。
そしてその裏に潜む「メガミ」の真実を暴いていく、ミステリアス
で、ダークな恋愛ファンタジー。

1 - 1 ユウウツ

「――どうすれば、死ねますか？」

担任の杉原響一郎は、何の反応も見せなかった。数秒の沈黙のあとで、奴が発した言葉は……罵倒だった。

「お前が、弱いから。お前が、気にしすぎるから」

すべての原因が、俺にあると決めつけた。俺の心身が病んでいるという事実でさえ、奴は認めようとしなかった。何より、「鬱」の存在を理解しようとしないうちに腹が立った。奴は、初めからまともに俺と向き合う気などなかったのだ。

俺にとっては監獄に等しい。それが、学校という名の閉鎖空間だ。

「いんいちがいち、いんにがに……ししじゅうろく、しごにじゅう……くはしちじゅうに、くくはちじゅういち……」

毎日のように、先生に自慢していた気がする。

最後に誉められたのは、九九を覚えたときだった。友達に囲まれ、いつも周りには笑顔があふれていた。毎日家に帰ると時間の流れが遅く感じた。早く明日を迎えようと、毎晩九時に眠りについた。朝目覚めると、ある種の興奮を覚えていた。

この瞬間が永遠になることを望んでいた。そうなると信じていた。

――俺は、いったいどこで選択肢を間違えたのだろう。気がつく、俺の歩む道は狭まっていた。知らず知らずのうちに、誘導されていた。その道の先にあるもの、それが、今という忌まわしき時の流れ。憂鬱だ。もう、この二文字では言い表すことができないほどの感情。しかし、生憎俺の語彙力では、こう表すことしかできない。そんな無駄な思案を巡らすことで、また憂鬱に拍車がかかってしまう。いつものパターン、負のスパイラル。

何も生まれない日常を、ただ生き続けるだけの日々。俺は、正体不明の不可抗力に導かれ、学校へと歩を進める。教室に入ると、そ

こには変わり映えのしない、つまらない世界が広がっている。誰とも目を合わせることなく自分の席へと向かい、そして、立ち止まる。

机の上に、花瓶。その意図は、言うまでもない。

だが、そんなものにかまっている暇はない。周りの連中の目が、こちらへと向かっているのはわかっている。その囁きも、嘲笑も、すべてが俺に対してのものだということは、とうの昔に理解している。脳に、記憶に、刻みこまれ体得したこの感覚を、連中は「被害妄想」としか扱わない。それも、十分パターン化された事象。

俺は花瓶を手に取り、ゆっくりとあるべき場所へ戻す。そのままであれば被害者で、普通、入室した先生は詮索を始めるだろう。ただ、ここでは「普通」が通用しない。おそらく、頭のおかしい奴くらいにしか思わないはずだ。怒りの矛先は、連中より、むしろ俺に向いてしまうかもしれない。

過去は変えられない。入学当初の初々しい希望に満ちた瞳など、俺にとってはただの遺物。「退学」という選択肢を選ぶことで、この監獄から逃れることはできるだろう。しかし、そのカードだけは絶対に切りたくない。切るわけにはいかない。

負けっぱなしでいいのか？……いや、いいわけない。ただ、報復の手段が見つからない。今はまだ、その時ではないということか？ わからない。だが、今は我慢すべき。溢れそうになる思いを心の奥に押し込み、耐える。……耐えるしかない。

いつものように、授業をただ聞くだけという、無駄な時間を過ごす。教師は、敵。「イジメハダメダ」などと、まるでプログラミングされたようなお決まりの台詞を吐きつつ、自らはそれを遂行しない。女子生徒ににうつつを抜かす一面と、俺に対し、「指導」という名の攻撃を喰らわす一面。反論は許されない。「退学」というカードをチラつかされた状態では、生徒は教師の奴隷でしかないのだ。「——んじゃ、原稿返すぞ。あ、鈴森だけは、手元がないからまた

あとでな」

そういえば、先日の校内小論文コンクールの結果が廊下に貼り出されていた。当然ながら、俺の名前はない。無作為に選出された教師によって作品の審査が行われ、誰が書いたかわからないコメントとともに返却されるのだが、これは……杉原と見てまず間違いはない。

一言で言えば、ズタボロ。今回は「鬱」をテーマに、上手くまとめあげたつもりでいたのだが……何故か表現しがたいほど痛い言葉が羅列してある。もっと調べるだの、病状についての知識が乏しすぎるだの、何様なんだろう、この人は。大げさすぎて小論文としての形が成り立っていない、これでは小説だ——って、今の、実際の俺の状況を引用して書いているのだから、それが鬱つてもものだろう？……とはいえ、小説になつてしまったのは反省点か……。いつも俺はこのパターンに陥っている気がする。人と同じことをするのが嫌で、すべてに趣向を凝らしすぎてしまう。しかし、結果、それが賞賛に値することはなく、ただ異質として認知されるのだ。

あの楽しかった小学生の頃でさえ、発表会や自由研究といったアピールの場では、ことごとく失敗していた。ただの工作だというのは、殺人兵器を作ってしまうような子だった。……そして、俺は実験という名目で、飼育小屋のうさぎを一匹この手にかけた。学校は児童を疑うようなことはしなかったが、案の定、連中は俺を犯人と決めつけだした。陰で、密かに。……たしかに、それで正解なんだけどな。

そのとき、俺は初めて知った。「友達」は、心から信用すべきものではないのだと。そしてそのあとは……当然、一人になる。男女がそれぞれのグループを形成し始め、大きな友達の輪のようなものがだんだんと消え去っていく中で、連中は皆、俺をはじき出したんだ。

俺の文章を例に出し、国語の授業が進められてゆく。俺の存在が気に入らないのは理解している。もう、慣れた。描写するのが鬱なので、早く時が経つのを期待する。

1 - 2 スズモリ

授業が終わる。休み時間の十分が、唯一の、教師の支配から解放される時間。ただ、授業中は休み時間を恋しく思うこの俺が、休み時間は授業時間を恋しく思う。なんというあまのじゃく。それはすべて、奴らの、「無」という仕打ちのせい。

「よおよおお、昨日マジパねえ動画見つけてよ、ありや絶対見た方がいいからホントマジでホントに！」

「おいおい、落ち着けて。また……アレな系だろ？」

「……よくわかってんじゃねーか」

「ついでに言うと、黒髪ロングのグラビア、まゆりんだろ？俺も見だよ」

「それだよそれ！ いやあ、さすが……お前ならわかってくれると思っただぜ！」

思春期の男子ならではのトーク。当然、俺にもわかる。その会話の内容すべて。だが、踏み出せない。踏み出せば、いけない。皆の眼中に、おそらく俺は存在していないからだ。以前にも同じようなことがあった。何の話題だったかは忘れたが、とにかく俺は会話に入ろうと一步を踏み出し、そして見事に地雷を踏んだ。周りからはわからない、体内の時限爆弾ともとれるような、そんな地雷を。

別に、俺が優等生という部類に含まれているから、という理由ではないらしい。「真面目キャラ」である奴も、その会話に、コミュニケーションに参加しているからだ。ただ、何故か俺ははじかれる。たとえば、その会話が及ぶ範囲……同一円周上に俺がいたとしても、会話は俺を介さず成り立つ。精神的孤独感、とでも言うのだろうか。周りの生徒たちから見ると、俺もそのコミュニケーションの一員に映っているかもしれないが、実際は違う。断じて、違う。

クラスのお調子者が、今日もくだらないトーク、そして一発芸で注目を浴びる。決してそれが俺の理想というわけではないが、この

学校では、そういう連中のみが評価され、もてはやされる。おかしい、絶対におかしい。いつも無口だというのに、コミュニティで微笑んでいる奴もいる。正直言って、俺も「無口」の代表格だ。ただ、受け入れられないのはこの俺だけ。何故。俺の「無口」の根本的な原因は、貴様らにあるというのに。

成績という尺で測った場合、俺は連中より遥かに優れた結果が出るだろう。だが、誰にも誉められたことはない。むしろ、それが当然であるかのような対応を受ける。連中も、教師も、親、親戚までもが。別に、誉められたいわけではなく、ただ――

ただ、他人に認められたい。存在を、俺という人間の、生きる価値を。

いつしか、それが俺の生きる理由……学校という名の監獄へ、毎日足を運ぶ原動力となっていた。しかし、俺はその光明さえ見えない状態で、そんなことを考えている。そのせいだろうか、俺は、何も起こらない学校で、何も起こらない日々を過ごすだけとなっていた。唯一の変化といえば、俺の脳を圧迫している、「奴ら」への憎悪……そして、自分への劣等感だけだ。

正直、目に見えるいじめの方が、当人にとっては楽かもしれない。周りにいる連中が、そのいじめの存在に気づくからだ。詳しく説明するなら、俺が「いじめキャラ」として皆の心の中に定着するということ。こうなると、案外それがネタとなり、逆に俺への注目が集まるようになるのだ。攻撃側の連中は、本気で俺を殺したいのかもしれない。しかし、絶対に殺そうとはしない。現代っ子の精神は、所詮、そんなやわなものだ。無論、ゲームのリセット思想を持つ奴には注意が必要だ。そして、いじめの存在が明るみになることによって、連中は自らの評価を気にしだす。そうならなくとも、誰かが俺に同情する。復讐こそできないものの、何かの変化を見ることができる。

その「何か」を封じる。それが、精神的孤独感という俺に与えられたどうにもできない攻撃の真の目的だ。ふと、今そこでお笑い担当の奴が見事なスベリを見せてくれたので、それに例えてみる。漫才というものは、一発ギャグと違い、ボケとツツコミの兼ね合いにより笑いを生み出す。相乗効果、とでもいうのだろうか。しかし、ボケたのにも関わらず、誰もツツコミをいれなかったらどうなるだろう。ボケ役の彼は、ただの阿呆にしか映らない。何か、突き放されたような感覚を覚えるのだ。そして、日常的にそれを味わっているのがこの俺、木枯虚羽というわけだ。無理に自分でノリツツコミをしても滑る。状況を変えようと必死にもがくが、蟻地獄にはまるだけ。俺には策も、特効薬も無いのか？

こんな思想をめぐらす日々は、驚くほど遅いスピードで過ぎていく。この支配……蜘蛛の糸から脱け出せる日まで、あと約二ヶ月。ただ、それが本当の時間なのかは不明。極端な言い方をすれば……体感的に、五年かも十年かもしれないのだから。

いつも通りに家を出て、見慣れた風景——もはや見る価値もない風景を眺めつつ、蜘蛛の巣の門前に立つ。上履きに履き替え、階段をのぼったその先で、つまらない日々は俺を待つ。木漏れ日がまぶしい朝の教室で、今日も無価値な人間が無益な微笑みを——していない。なんだ？　なんだこの異様な静けさは……！

「あ」

ドアを開け、一步目を踏み出した瞬間に、クラス委員の鈴森らしき声が耳に入る。確実に、俺を見た。何故。その問いは、問うだけ無駄なもの。俺にはわかる。

ふう、とため息をつきつつ、鞆を机の横に落とす。花瓶だけならまだよかった。しかし今日は、いつもの風景が花束にまみれている。とりあえず、例によって例のごとく花瓶を元の場所へと戻し、席に着く。一見……というか俺の視点を他者が見るとするならば、ここは花畑。案外、居心地は良いかもしれない。が、さすがに状況が状況だ。菊の花が大多数。俺は弔われたのか？　いや、弔われるなら

まだマシか。誰も俺の死を悼もうとせず、薄笑いを浮かべる方が現実味がある。今だって、百合やシクラメンなどを贈られることに比べれば、不吉なメッセージが若干和らいでいるため心を落ち着かせることができる。ただ、何か不自然だ。――中途半端。花瓶のより上をいった仕打ちなら、菊はどうなのだろう？ たしかに「死」を暗示させることはできるが、この連中にすればやはり又ルい。……まあ、何だっていい。「死ね」という願望は、痛いほど伝わった。とりあえず、この花畑は不快。俺は適当につかみ、後ろの席に花束を置く。まだ、ここの主は登校していない様子。昨日席替えしたばかりで、誰が後ろかはわからない。だが、この教室内に味方はいない。だから誰だっていい、俺が苦しまなくて済むなら。そして、俺以外の人間は皆、この程度の仕打ちを受けて当然の存在。いや、死をもつてしても、償いきれるようなものではないかもしれない。「……ごめんなさいね。ありがとう」

「？」

鈴森が謎めいたことを言う。不覚にも、感情を顔に出してしまった。彼女はそれを察してか、説明……いや、弁明を続ける。腕を組み、ため息交じりに声を出すその姿は、そっだけ切り取れば大人な格好だが、実際は、中学女子の平均身長を遥かに下回るちびっこだ。「席を一つ間違えちゃったみたいね……で、でもコガラシくん、柏木さんのこと知ってたんだね。……あ、当たり前か。何言ってるんだろ、私。あはは」

あははって何だ。訳がわからない。何を言ってるのか、聞きたいのは俺の方だ。……間違えた？ 本当に花束を贈るのは後ろの生徒――柏木に対してだった、ということか？ 待て、その論理には、明らかに矛盾が生じる。

「――よし、終わり」

俺が手を止め、脳内に引きこもっていた間に、彼女は仕事を済ませていた。ただ、俺の発言を遮るようなタイミング。これも、計算か？

ようやく綺麗になった机を前に、しばし、黙考。朝のホームルームの開始を告げるチャイムが鳴るが、いつものように杉原はやって来ない。気がつくと教室全体が、沈黙に包まれている。その中でもう少し、今の鈴森の行動を考察してみる。

——単純明快に言うと、偽善。俺の机には、基本、毎日誰かが花瓶を置く。今朝も、同じように花瓶は置かれていた。おそらく、彼女が花束を置いたときも、そこに花瓶はあったはずなんだ。つまり……俺の机がそこにあることを知った上で、彼女は花束も置いた。

自身のミスを謝りつつ、俺への配慮を行うクラス委員。一見、その鏡的存在の行動だが、実際は違う。もし、彼女が意図的に俺の席へと花束を置く場面を他者が見た場合、確実に彼女の信頼度は落ちてしまう。あの計算高い彼女が、そのようなことをするわけがない。だがそう考えると、嫌でもたどり着く結論が、ある。

彼女だった。今まで花瓶を置き続けていたのは、紛れもない鈴森の仕業だったんだ。だから誰も何も言わない。わかってるから。いつもの、ことだから。そして彼女を中心に、俺への包囲網は形成されていた。クラス委員という立場を最大限に利用した手法……それは、まるで杉原のよう。気にいらぬ、そんな行動に、何の意味があるという？　そして、それに反論せず従っているであろうこの連中……。騙されるな、人は見た目じゃない！　鈴森の姿をしているだけの、本当の彼女を見極める！

ただ、今は泣き寝入りするしかない。四面楚歌、まさにそんな感じだ。反撃の時は、今ではない。その瞬間まで、待ち続ける。待つて、待つて、待つて……いつか、必ず。

1 - 3 マケイヌ

そうした長い沈黙のあと、いつになく神妙な面持ちの杉原が入室し、静かに教卓へと書類を置く。見慣れた無精ひげも今日はまったく見ることができず、身を包んだ黒いスーツが、奴の醸し出す空気を、どこことなく重苦しいものになっている。奴は、俺の方を一瞬見たと思うと、不似合いなネクタイを直し、ホームルームを始めた。

「……皆、その様子だと知っているようだな」

数人の視線が、俺——いや、俺の後ろにいるはずの人へと向けられる。そこには今、花束しか無いのだけれど。

「柏木が、死んだ」

別に躊躇うわけでもなく、奴は淡々と口にした。

教室内の空気が、ひどく張りつめているのがわかる。当然と言えば当然なのだが、何だか腑に落ちない。皆のこの表情、教室を支配するこの空気、全てがフェイクであるようにしか思えない。

柏木——柏木なつめの死を嘆く連中が、今、この場にいるはずがない。同情は偽善でしかなく、哀れみは自己防衛のコマとして使用しているに決まっている。これは俺の推論……いや、思案をめぐらし終えたあとの「結論」なのだが、柏木は、貴様らによって「殺された」んだ。奴の発言も、正確に言えば間違っている。自らの責任を隠すため、「死」という事実のみを口にした。——なんて、そこまで考えが及ぶ連中ではない。無自覚……ある意味最も罪深き状態。「十時から、体育館で緊急集会だ。それまで自習」

奴はそう言葉を残し、教室から走り去っていった。職員会議でもあるのだろう。事実が表に出れば、教育委員会から何かしらの注意や刑罰が下ることは目に見えている。このご時世、マスコミだって黙ってはいないはずだ。ただ、それだけでは足りない。数ヶ月経てば、人々の記憶から「柏木なつめ」は消え去り、彼女のいない教室が、非日常なものでは無くなってしまふ。

せめて、「明らかに私が犯人」そう思う奴がいてくれれば、それは少なからず罪悪感にさいなまれ、彼女の死が永遠に記憶に刻まれる。しかし、不特定多数、無自覚の加害者に、不明瞭な状況証拠……これでは、事件として扱われることもなく復讐にも何にもならない。ただ、自身の物語の幕を下ろすだけなど、犬死にだ。

ここで俺がどんなアクションを起こしたとしても、おそらく何も変わらない。——柏木、お前は弱い。弱すぎた。だから負けた。自ら敗者の道を歩むなど、馬鹿としか言えない。

俺はそんなことを考えながらも、右手で方程式を解き続ける。正直、高校入試程度であれば、もう一切勉強しなくても平気な状態だろう。こんなこと、無駄以外の何物でもないというのに——そんなことわかっているというのに、俺は何をしている？ 純粹に合格のためではない。今流行りのインフルエンザ……たとえ四十度の熱であつたとしても、俺はいたって冷静に、合格を勝ち取って見せるだろう。

では、何故？ プライドか？ 学年トップの意地なのか？……くだらない。

いい加減、理解しろ。俺は認めてもらえない。努力する必要もない。目立つことはするな。普通に生きれば波は立たない。ただ、それでは物足りない。目立ちたい、誉められたい。——ダメだ、捨てる、捨てる、捨てる！

思わず力が入り、シャー芯の先が折れ、転がる。紙上の数式は、いつしか希望と打ち消し……「たい」と「ない」が支配する世界へと姿を変えていた。俺はペンを置き、腕を組んで目をつぶる。教室内の音、すべてが耳を駆け抜けていく。

そこに、もう、「柏木なつめ」は存在していない。本人が、というわけではなく、彼女の、話題がだ。そして、喜びでも悲しみでもない、ただ無の感情が漂う。しかし、心なしか、会話のトーンがあがっている気が……したような、していないような感じを受けた。

もう、どうでもいいのだろう。皆、直接口にすることはないが、

内心、喜んでいるに違いない。あれは……ポーカーフェイスだ。人間の皮をかぶった、死神だ……。……………。

「時間だ、移動しろ」

唐突に響いた杉原の声。どうやら俺は、あのまま眠っていたらしい。夢の中までネガティブシンキング……。少し、滑稽だな。俺は小さく笑みをこぼし、席を立った。

1 - 4 ムジユン

——脱出、成功。こういうときだけ、俺の持つ「貧血」というバツドステータスがありがたいものを感じる。隣接の体育館からは、教師の誰かの声が聞こえる。どうせ、皆同じようなことしか言わない、形だけの挨拶。あの寒さに耐えてまで、聴くほどの価値はない。俺が、このベッド——暖かな保健室へと逃げ込んできたのには、もう一つ理由がある。それは、連中の表情のせい。決して、悪魔だとか死神だとか、そういった類のものではなかった。「普通」だったのだ！ 涙を流していたのだ！ 俺が思っているように、それは「普通」だ。しかし、何故か居心地は最悪だった。おそらく俺は、あの雰囲気ではなく、柏木の死を悼む連中の心から逃げ出したのだと思う。……いつもなら、「すべてはフェイク。皆、偽善者なんだ」と、批判しているはずなのに。

ふと、ここで、矛盾が頭をよぎる。いや、「やっと気づいた」という方が正しいか。

今まで、何もしていない（だろう）俺に仕打ちを与えることは、「異常」だと思っていた。つまり、俺自身は「普通」であると、信じて疑わなかったわけだ。今この瞬間、連中は「普通」で間違いない……俺と同じ、「普通」の存在で。

やはり、おかしい。

前提条件を整理して、考察し、模索を続ける。ただ、今の俺はあの輪の中に参加していない。同じ感情を共有できていない。それならば……それならば……。

考える、考えるんだ。——しかし、俺が「異常」であるという結論にしか行き着けない。俺は、自意識過剰な馬鹿だったのか？ 周りと違う、だから周りがおかしいと思う。当然だ、俺は正しいのだ

から。……ここか。もう笑うしかない。結論に行き着いて初めて、客観的に自分の思考回路を分析できた。皆が異常だから俺が浮いて見えるわけではない。俺が異常だから浮いて見えるのだ。一般人なら、まず自分の行動を省みることだろう。しかし、俺はこの高いプライド故なのか、その行為を怠った。自身が原因となるなんて、その可能性をパーセントも考えようとはしなかった。はっ、なんて滑稽なんだ。なんて……

「なんて俺はっ！俺は……おれはああああ……」
ベッドから体を起こし、無意識に枕を殴っていた。殴り続けていた。

どうすればいい。俺はこれから、どう生きればいい。これは、考えるだけ無駄か。親の傀儡として生きる。どうせ俺にはその道しかないんだ。勉強、勉強、勉強……まずはこの学校で一番になろう。入試で満点を取るう。その先、高校でもトップで居続けよう。そして大学を首席で卒業。日本一の秀才になろう。いや、まだ先……世界の頂点に立ってやろう。毒を食らわば皿まで……いや、少し意味が変わってくるな。とにかく、やり続けるしかない。俺には、この頭しかない。この、天性の頭脳しか。

誰にも認めてもらえない。それは中途半端だからだ。鶏口牛尾という言葉があるが、そんな小さな頂点では、駄目なんだ。せめて百獣の王、ライオンに。いや、もっと上……それは、神か？何だっ正しい。行ける限り、どこまでも行く。一番上まで登りつめれば、必ず誰かが祝福してくれる。それは、イコール「存在を認めてもらえる」ということだ。

俺はやる、絶対に。やらなければ、俺に意味はない。価値はない。

決意を新たに……いや、自己暗示をかけ終わると、俺は保健室を出た。体育館の横を通る際、誰かの視線を感じたが、もう、そんなのに構っている暇はない。今日はもう授業も何もないだろう。鞆を

とり、学校をあとにする。

家までの道のり。いつもなら音楽プレーヤーをかけているのだが、何故か、そういう気分にはなれない。たった二十分の家路の中とはいえ、今のこの熱が冷めるのを恐れている。正直、この自己暗示は初めてのことでない。もう、何千何万と繰り返してきた。本当に些細なことを気にして、他者に少しでも近づこうとする。しかし、それ故に慎重になりすぎる。結果、他者との距離は広がるばかり。そのたびにこんな複雑な感情に飲み込まれ、脱け出したいと思いつつ、孤高の存在になることを望む。

人を欲し、人を恐れる。孤独を望み、孤独を捨てたがる。

俺は、いったい何がしたいのだろう。わからない、答えが、見つからない。それなら、考えるだけ無駄だということ。今はまず勉強だ。知識の補充に限界はない。すべてを、俺の復讐の未来……そのためだけに使え。

後ろのポケットに手を入れ、歩幅を少し大きくして歩いてみる。ホームシックだとか、そういう類のものではないのだが、早く家に着きたいと思っていた。

結局、俺はこの日、一睡もせず机に向かった。精神が不安定であるために、何かに熱中した場合も、そののめり込み具合が他者とは比べ物にならないほど高いのだ。いわば、「熱しやすく冷めやすい」そんな感じだ。ただ、今回だけは冷ませない。負のループから脱け出すには、動かなければならない。

これでいい、このままで。睡眠という行動を忘れたまま朝を迎え、俺は学校へと向かう。正直、俺は睡眠時間というものをあまり気にしていない。夜十時には必ず床につく、そういった人の感性が理解できない。人間の一日の平均睡眠時間は八時間という。つまり、人生の三分の一を睡眠に費やしているということになる。もしも、一秒も寝ることなく生き続けられる人間がいるならば、そいつは明ら

かに優秀な人材となるだろう。同じことをして過ごした場合、一般人より吸収量は遥かに上だからだ。

簡単。磨くことを怠らない限り、たったそれだけで人は人を超えられる。しかし実際、それは到底無理な話で、いつかどこかで寝てしまう。当然だ、仮にも人間なのだから。

——正直、眠い。こう、何も生まれない論理を巡らしているのは、本能的に睡魔に抗おうとしている証拠。でも、それより大事なのは意志がブレてないということ。いい傾向だ。

この監獄も、使いようによれば価値はあるかもな。「受け身の勉強では駄目だ」いつか杉原の言った言葉が、本当だったと感じる。授業や指導を面倒くさがったの発言かと思っていたが、そういう意図もあったのだろう。いや、奴がそんなに頭がまわるとは思えない。

1 - 5 ソウシキ

教室のドアが、いつになく軽く開いた気がした。

「……………」

しかし、その先に待つのは圧倒的な無の視線。自身は変えられても他者は変えられない。わかってたことだ。俺はいつものように花瓶を……花瓶を……え？

机の上に何も……無い？

待て。何だよいったい？ 柏木の…… 柏木のせいなのか？ もう、いじめないのか？ 何だっていい。別にいじめを欲していたわけではない。今の子どもは、必ずと言っていいほど群れて行動する。一人じゃ何もできないのだ。それは、常に集団心理の中に自分を置くことを意味する。つまり、あるコミュニティで誰かがいじめを恐れた場合、すぐにそれが伝染する。実際は、柏木が死んでしまった……その再現を、恐れているのだろうけど。

「おい」

気がつくと、後ろに栗山という男子生徒が立っていた。長身であるためだろうか、世界を見下したような冷めた目が特徴的だ。最も、こいつ以上に見下している奴が、ここにいるけど。栗山は、右手で前髪を整えながら寄ってきた。

「……………何？」

いつも通り、最少言語でコミュニケーションを乗り切ろうとする。下手に話すと色々なものを失う。それ以前に、会話という行為がトラウマになりつつあるのだ。

「柏木さん…… お前のせいで死んだんじゃないの？」

耳元で小さく囁いたその声は、俺の心を土足で踏みしめる。

「……………何故？」

どうしてそんなことを聞くのか、どうして柏木を殺さなければならぬのか、二つの意味を込めて返す。栗山は、俺の質問を超えた答えを告げる。

「お前が別れたから。それ以外に無いだろう？ 信じていたものを失い、一人ぼっちになっちまった。死ぬ理由には十分じゃないか。

お前のせいだ、お前が柏木を殺したんだ」

「ふざけるな。それとこれとは話が別だ。それに……」

お前らのいじめが原因で死んだに決まっているだろう、そう言いたかったが、耐える。

「……お前の意図がわからない。この質問に、いったい何の意味があるんだよ？」

我ながら、上手い返しだったと思う。おそらくこの答えが、花瓶が置かれていなかったことにも関係してくることだろう。

「ふん。僕からしてみれば、女の子を泣かせる奴なんて、失格なんだよ。恋愛失格……！そして今度は鈴森か……？ お前さえいなければ、俺は今頃……」

いや、こいつが相当の女好きなのは知っているのだが、勝手な妄想で俺に当たるのは辞めてほしい。俺は、あくまで鈴森を恨んでいるだけ。決して恋愛感情ではないのだ。

意味がわからない。栗山の発言も、奴が眉間にしわを寄せる理由も。

「どうした？」

「何でもない。ただ、いじめたくなっただけだ。……戻る」

それが一番頭に来る。お前はどこのガキ大将か、なんてツツコム間もなく、栗山は自分の席へと帰っていった。その途中、鈴森の前に立ち止まり、二、三言葉を交わすのが見えた。ほんの少しだけ、彼女の微笑みが見えた。

何も起こらない日常が、非日常に感じる。とはいえ、邪魔がないことに悲嘆する理由はない。杉原が入室し、普通のホームルームが始まる。俺も普通の世界に入れたかと思うと、少し、笑みがこぼれ

る。

「えー……柏木の件だが、今日の夕方、彼女の家で葬儀が行われるそうだ」

ぼーっと、杉原の言葉を耳に通す。それは、この空間にいる連中、全員に共通する感情だと思う。

「それで、さすがに全員で行くわけにもいかないから……二人、二人ほど代表で行ってもらおうと思う。——鈴森」

「はい」

澄んだ声の返事。優等生の典型的な声……とでも言うのだろうか。杉原よりも耳に優しい。ただやはり、年齢不相応にクールなところが気にはなる。……失礼にも程があるか。

「あと、コガラシもだ」

「……………」

来ると思った。目だけ合わせ、「わかった」と合図を送る。

「放課後、校門前に集合するように」

柏木に会える。それに対しては何の感情も起こらないが、鈴森と一緒にすることは気になる。たしかに、クラス委員という立場を考えると、葬儀に出席するのは当然のこと。しかし、こいつは柏木からは敵対する立場……というより、一方的に柏木を孤独へ追いやった張本人。実際、俺もその標的にされていたわけだしな。

そして迎えた放課後。特に友達がいるわけではないので、教室にただ無駄。俺はさっさと校門へと向かう。当然一番乗りであるため、常備している単語帳に目をやる。これまた当然のことであるが、あとから杉原と鈴森が歩いてくる。別にいやしいことがあるわけではないのだが、反射的に門の外側に隠れてしまう。

「——先生、ありがとうございます」

「構わないよ、このくらい」

「これからのことも、わかっていますよね？ 計画通りに、お願いします」

「もちろんだ」

計画？　これから？　いや、気にしない方がいい。平静を、保て。
「……………」

静かに視線を向ける。二人は何の反応も示さないまま、杉原の車へと進む。俺も、無言のまま乗り込む。

柏木の家は、学校からそう遠くない位置にある。故に、土地勘のある人物なら、選ぶルートは一つしかない。今、この車はそのルートを完璧にたどっているわけだから、大丈夫。俺に、何かすることが目的ではない……………はずだ。無言の車内で、俺は俺を待つどんな運命にも逆らおうと、覚悟を決めていた。

「着いたぞ。俺はあとから顔を出す。二人で先に行ってる」

「はい」

葬儀の場には、すぐ着くことができた。ここまで、俺は一言も発していない。まだ人も集まっていないようで、いくつかのコミュニケーションが作られ、知らないおっさんたちの談笑の音が響いている。その目からは、悲しみを隠そうとしているのが伝わってくる。

何もすることがないため、とりあえず席に着く。沈黙。ただ、それはすぐに打ち破られた。聞き慣れた、優等生の声によって。

「……………コガラシくんは、彼女の死をどう思う？」

またこの質問。ここで正直に答えていいものか。……………まだだ、我慢だ。

「わからない」

「そう」

会話が終わる。その意図を、何もつかむことができないまま。くそ、鈴森といい、今朝の栗山といい、俺から何を聞き出したいんだ？　わからない……………本当にわからないことだらけだ。

この空気から脱け出す術はないか、なんて考えることはない。俺はただ、柏木に会いに来たんだ。それが目的、それ以外に何があるってんだ。

「柏木……………」

俺の座るイスの目の前。そこにある木箱は、今までに見たその種

の中で最も小さい。ふたをとり、現れた白い肌に手を伸ばす。頬の冷たさは、想像を遥かに超えていた。表面的な温度ではない。心に直接響きわたる、氷のような感情。悲しみ？ 寂しさ？ それとも恨み？ 柏木の心を完全に感じ取れたとは思わない。ただ、何かが響く。それに心を揺らされる。俺の中にある柏木への想いは、まだ、消えてなかったのかもしれない。

「柏木さん……どうして……」

「！」

涙。柏木の頬に伝う、一粒のしずく。俺のものではない、気がつくとも横にいた……鈴森のもの。俺は、記憶にある中では泣いたことではない。だから、「涙」の難しさはよく知っている。その目は、とても幼くて、普段の彼女からはまったく想像もできないものだった。ただ、今の彼女の方が、彼女らしくも感じられた。

「……………」

突如、俺の胸に飛び込んできた彼女に、俺は何も言うことができなかった。この現実を、どう受け止めればいいかわからなかった。泣きじゃくる妹を、包み込むような優しさを持ち合わせていればいいのかもしれないが、生憎俺は一人っ子。親戚一同見渡しても、彼女に近いものを持つ奴はいない。

「……………ご、ごめん、私……」

これは、そのままを認めていいのか？ 中途半端に、肩に触れることしかできない。

「……ありがとう。木枯くんって、いい人だね」

俺は、あえて何も言わなかった。言えなかった。

最後の夏、俺の中学野球史は幕を閉じた。明と暗、灼熱のグラウンドにこだまするのは、勝者の歓喜。俺のチームは、皆泣いていた。地に伏せてまま、起き上がれない者もいた。その中で一人、俺は立ちつくしていた。感情を押し殺す。以前は苦労していたが、もう、慣れた。自然に、無を生み出せる。これが、俺の普通。

鈴森の涙は、嘘ではない。偽善ではない。こいつには、謝罪の意

があるのか？ 自らの行為への責任を、自覚していないんじゃないかな？
ったのか？ いや、違う。本心から、死への悲しみを表現している
に過ぎない。自分のせいではないと、本気で思っているんだ。

「すみませんが、お席に……」

「あつ、はい」

あれは、たしか柏木の父親。細々とした声は、その大柄な体格に
合っていない。俺が最後に会った日は、あんなに小さく見えなかつ
た。最後…… 柏木と別れた、クリスマスの日には。

1 - 6 トウボウ

式が終わり、いよいよ最後の別れというやつだ。柏木の元に花を贈り、最後の交友の時間……とでもいうのだろうか。相手は、何の感情も持つてはくれないけど。もう一度、彼女の頬に手を当てる。当然、温度は変わっていない。これが、死。

白装束に身を包み、眠るように安らかな目をしている。彼女は自殺。おそらく、薬物か何かを使い、静かに死んでいったのだろう。お前は一人で戦い、負けた。俺も、一人だ。しかし、負けない。別に、お前の分まで復讐しようとか、そういう考えは起こらない。俺は俺のために、俺が俺であるために、戦うんだ。

さらにもう一度、死に触れる。……反面教師？ いや、違うな。連中にも、身をもつてこの感覚を知ってもらうためだ。貴様らはもう、殺人犯なんだ。死をもつてでしか、この罪は償えない。おそらく、俺も殺したい対象なはずだ。わかっていて、じゃあ殺してみろ。心の奥に潜んでいた火種は、だんだんとその勢いを増す。先ほどまでの穏やかな自分に、戻ろうとしても戻れない。殺し合い？ 上等じゃないか。監獄を舞台としたデスマッチ、楽しくなりそうだ。お互い、殺すだけの理由はあるみたいだしな。

はっと、冷たい肌の感触に現実へと引き戻される。駄目だ、他人のいる場所で、感情は表に出してはいけない。いくら、すぐ横に憎むべき相手がいるからって——え？

この空間を支配する、悲哀に満ちた何かに気づく。鈴森だけではない。周りにいる、すべての人間の涙がその何かなのだろうか。遅れて登場し、今もずっと後ろで見ている杉原までもが、目頭を押さえている。その中でただ一人、俺は平然とした表情でいる。はは、また一人かよ。柏木、やつぱ俺、お前とお似合いだったかもな。

瞬間、柏木が少し笑った。いや、正確にはそう見えた。俺を哀れんでくれているのか。はっ、全然恰好つかねーじゃねーか。死んだ

奴に、愛していた奴に、俺が同情くらうなんて……余計なお世話だ。俺も微笑み返したが、それが、鈴森の逆鱗に触れる。

「……何を、笑っているの？」

「え？ あ、いや、柏木がな……」

不覚にも、何も考えずに返してしまった。鈴森に、目も合わせようとせずに。

「……やつぱり、あなたなの？ いや、疑問形で聞くのもおかしいわ。——あなたなのよね、彼女を死へ追いやったのは」

冷静モードの彼女より、さらに深く暗く冷たい。そんな声色だ。

「お、おい……俺は関係ない。さつきも、わからないと伝えたじゃないか」

「そう自分に言い聞かせているわけではなくて？ 今のあなたは、どうせ作られたあなたなのよね？ 私、知っているの。あなたが、心の奥でどんなことを考えているか」

「……何の、ことだ？」

俺には、見たこと聞いたこと、ほぼすべてを記憶してしまう能力がある。暗記物が得意なのはそのためなのだが、別に特別なことだとは思っていない。成績上位者なら、持っていて当然のものだからだ。正直、「能力」なんて言い方をするほどではないかもしれない。俺の思想を、俺は他人に話したことはない。話そうとも思わない。唯一、話しかけそうになった奴が一人いるが、そいつはもうこの世にいない。それを、こいつは知っているというのか？——駄目だ、波でやってくるあの感情は、本能的な衝動によるもの。いちいち記憶なんてしていない。わからない、どこで知ったというんだ。……いや、まだわかってしていると決まったわけではない。鎌をかけているその可能性もありえる状況。認めたくないが、こいつは俺を抑えるほどの実力、成績を持つ。頭のキレは、俺レベルと仮定して考察するべきだろうな。

「あれ、覚えてないのかな。確実に、あなたはそう思っているはずなのだけれど」

案の定、こいつは核心を突いたことは言ってこない。当然だ、まだ理解していないのだから。その囁きに対し、俺は小声で低く返す。これが遊びでないことは、なんとなくだが理解している。……動揺を悟られてはいけない。小さく、小さく。心がけるのはそれだけいい。

「……だから、何のことだと言ってるんだ」

「わからないの？ あなたの本能が言ってるのよ。生きる意味のない人間は死ねばいい、存在の価値がない世界は滅びればいい。自身は完璧な存在、自分以外の事象はすべて消え去ればいい。無に帰すべきだ。そして孤独……いや、孤高になりたい。でも、なれないんだよね、あなたの意志が弱いから。あなたの精神は壊れてるんだから。あなたの――」

まるで、プログラミングされたように呟く鈴森。もう、そこにいるのはちびっこ中学生ではない。その遙か遙か先にいる、いわば女王のような威圧感。何故か直接心に響いてくる声。俺はどうすればいい？ いつものように頭が働かない。初めての感覚。しかし、ここで切らなければ俺は壊れる。それは間違いない。

「何よ、その目は」

鈴森も、俺の雰囲気が変わったことを感じ取ったらしい。

「……………」

しかし、無の視線に、鈴森は臆することもなく続ける。

「もう一度言っわ。あなたの無責任な行動が、彼女の首を絞め続けた。ゆっくり、ゆっくりとね。きつと、彼女は何も言わなかったでしょ？ 言えなかったでしょ？ でも、苦しんでいた、ずっと、ずっと、ずっと……」

俺は拳を握りしめる。抑えろ、抑えなければ、俺に未来はない。

「すべては、あなたのせいだ」

死神が、笑った。頭の中の、消えかけていた火種が再び燃え盛る。

「ふ……ふざけるなッッ！」

もう、どうなってもよかった。周りの注目を浴び、空気が張りつめたもの変わる。頼ろうとしたわけでも、謝ろうとしたわけでもないのだが、柏木の体を抱えあげる。会いたい。話したい。俺はお前から、聞かなければならないことがある。そしてお前に、言わなければならぬことがある。どうして、死んでしまったんだ。俺の、唯一の理解者よ。

はじめて、柏木の死に感情的になった気がする。俺はやはり、自分を偽り生きていたのだろうか？ 本当の俺は、いったいどこにいるというのだろうか？……こいつなら、知っているのだろうか。

「起きろよ……起きて教えるよ……知ってんだろ！？ お前は俺の

――」

起きるわけ、ないのに。こんなに声出したのはいつぶりだろうか。しかし、当然願いは叶わない。わかっている、わかっているのに……

……こうするしか、ない。

「やめなさい！」

後ろから腕をまわし、強引に引きはがそうとする柏木の父親。力だけじゃ、この人には勝てるわけがない。しかし、わかっていながらも、俺は離れようとしなない。もう、まともな思考ができない状態に陥っている。

「……放せ」

「それはこっちの台詞だ！ 赤の他人が……私の娘に近づくんじゃない！」

柏木は俺との交際を、親にずっと黙っていたらしい。それがバレてしまったのが、例のクリスマスの悲劇なわけだ。しかも、家を出る前に捕まってしまったらしく、俺は待ち合わせ場所で深夜まで待つことになった。受信メールをすべて削除され、取り上げられたケータイを返してもらってから返信「ごめん、もう会えない」が送られたのは、夜が明け始めた頃だったと記憶している。だから、こいつは俺の顔なんか知らない。メールを見られていたとしても、名

前だけでは、俺には行き着けないはずだ。

「他人？ 違う、柏木は……」

言葉が、続かない。俺は、何を言おうとした？ 俺という人間の存在を認める唯一の証人、そんな自己中心的な答えをぶつけるには、相手が悪すぎるというものだ。それならば……ただ単純に、恋人宣言でもしようとしたというのか？ いや、違う。今「俺」という柏木家にとって憎き存在が雲隠れしているというのに、自ら姿を現すなんて馬鹿のすることだ。しかも、俺はもう柏木と決別しているというのに。

俺は、自身の発言を放棄した。同時に、この雰囲気になんて耐えられなくなった。思考をめぐらす間に、いつもの俺に戻っていたのだろう。俺は、そつと柏木の体のあるべき場所に戻すと、人をかき分け、走り出した。ここに、俺はいてはいけない。存在する意味がない。……見つからない。

玄関から出ようとした瞬間、ひとりでドアが開き、見慣れぬ男とぶつかった。俺の体はふわりと浮き、すぐに落下。その場に尻餅をついた。おそらく大半が脂肪で構成されたであろうその風貌は、脳内で柏木の父親とダブリ、思わず睨んでしまう。

「……大丈夫か？」

差しのべられたその手を、俺は払うようにして立ち上がる。

「すみません、急いでいるもので」

実際、何も急いでないのだけれど。とにかく、今はこの空間から逃げ出したい。その感情が脳内を支配する。

「……お前、この家の者か？」

「違います」

「そうか」

このタイミングで聞くことだろうか。白のシャツにグレーのズボンといった、参列者にしては失礼極まりない恰好。仕事が終わリ、焦って来たとするならば、今の発言の意図がわからない。ただ、生理的に交わりたいと思わない……そう、監獄の教師のようなオーラ

を感じた。こいつは、誰だ。何をしに、ここへ来たんだ。

その問いの答えは、すぐに行き着けるものだった。柏木家から出てすぐ目に入った、道路沿いに停められた黒と白のコントラスト。

……警察か。そういえば、柏木の死を「自殺」と断定しているのは、よくよく考えると俺だけ。杉原は「死んだ」の一言で済ませ、鈴森や栗山にいたっては、俺を殺人犯として仕立て上げようとしているみたいだった。

とにかく、真相——柏木を囲む包囲網の存在——を、解き明かしてくれるのなら俺は満足だ。振り返り、開いたままの玄関に目をやる。ちょうど、奥から杉原が現れたところだった。二人が笑いを交えつつ話す姿を、少し不審に思い見ていたが、ふいに杉原が向けた目に対し、俺は反射的に逃げ出した。何故かは、わからない。体が、脳が、何かの危険を察知した。

1 - 7 ケイコク

家に帰ってからは、まったく勉強する気にならなかった。食欲もなかったし、眠たいとも思わなかった。そしてそのまま深夜を迎え、俺はあるノートを取り出した。そこに書いてあるのは、柏木との儚い幸せの日々。最初のデートでテンションがあがっていた俺は、その感情の高ぶりにまかせ、日記を書き始めた。例の、「熱しやすい」性格ゆえの行動。

当然、その後「冷めやすい」部分が現れるのは想定範囲内であって、それは約一ヶ月後にやってきた。ただ、想いが冷めてしまったのではなく、日常に楽しみを覚えたことによる、日記の放棄だった。今まで呪い続けてきた世界が、突然姿を変えた。記憶に刻み続けることだけに専念するようになった。この生活が、ずっと、続くと思っていた。

—— 柏木が、俺の方を向いて微笑む。そして、手を握る。お互いの愛をたしかめ合うように。この瞬間が永遠のものになってほしい。そう願わずにはいられない。しかし、運命は残酷だ。「ごめん、もう会えない」ふいに柏木が呟き、何故か、もう一度微笑んだ。そして……闇の彼方へ消えていく。無力な俺は一人になり、彼女の幻影を追い続ける。それが、どれだけ無駄なことだとわかっていても、やめることはできない。最後の笑顔は、いったい何を暗示していたのだろうか？ 俺の幸せ？ それとも、彼女の最後の抵抗……不幸な運命に対する、小さな、強がりだったのだろうか？ 脳内をめぐる彼女の笑顔。笑顔、笑顔、笑顔、笑顔——馬鹿、どうして何も言わないんだよ。

夢から目覚め、時計を確認する。柏木に会っていたのは、ほんの数分のことだったと気づく。夢が夢であることを、俺は理解してい

た。今更、何かを思うこともない。

ふいに、ドアの開く音と、子どもの笑い声が聞こえた。カーテンを開け、まだ薄暗い世界に目をやる。結露のため、窓からは何の情報も入ってこない。まだ頭がぼけているのか、スツキリしたいでも思っただのかはわからないが、ゆつくりと、窓を開ける。体を貫くような冷たい風に、とてつもない後悔を覚える。スツキリどころか、余計に動けなくなってしまいそうだ。ただ、その寒さと打ち消しあうような風景が、眼前には広がっていた。

白銀……というよりは、白を極めた白というべきかもしれない。柔らかく、儚さを感じさせる大きな粒が、街灯に照らされつつ舞い降りる光景に、しばし、時を忘れる。

見方で世界は変わる。いつか、誰かが言っていた言葉だ。この雪も、子どもたちにとっては嬉しく、待ち望んでいたものなのだろう。俺と同じく、先陣を切った子の声に起こされたのか、近所の子どもたちもパジャマ姿で次々と出てくる。俺は、何をするわけでもなく、彼らを見続けていた。俺には、あんな思い出はない。昔から雪は嫌いだったし、一緒に遊ぶ友達もいなかったから、余計に拒絶するようになった。今、そこにある風景が、小学生のあるべき姿であって、正解なのかもしれない。

俺は、選択肢を間違えた。どこかで、他者とは別の道に足を踏み入れてしまった。きつと、そこには底なし沼があり、俺は二度と戻ってくる事ができなくなったんだ。しかし、そこに天使が現れた。いや、女神だったかもしれない。彼女の差しのべた手につかまり、俺は沼からの脱出を図った。当然、空へと旅立つこととなる。もう俺は、普通の道を歩むことは不可能に近い状態にあった。

決して順風満帆とは言えないが、それでも幸せを感じていた矢先、彼女の羽はむしり取られた。体勢を戻すことも、再び飛び立つ力も無くなった。彼女は沼へ沈んだが、俺は、かろうじて生き延びた。とはいえ、沼の中でもがき続ける日々。だから、俺は願うんだ。いつか、自身の羽で飛んでみせる、復讐という、未来を手に入れるた

め。……今はまだ、小さな羽だけでも。

俺は、また夢を見ているのだろうか。窓のサッシに手を触れたまま、心は脳内の物語の中。思考にふけるのは、俺としては日常なことではあるのだが、ここまで柏木のことばかりが巡るのは、正直予想外のことだ。……一度、寝よう。まだ、一時間は時間に余裕がある。ベッドでは熟睡してしまう可能性がある。ソファに座り、毛布をまとった。

——あつという間に過ぎた一時間。最悪の目覚めを迎える。またしても、柏木の夢……だが今度は、ずっと笑顔を見せるだけ。俺が病んでいるのだろうか、それとも、これは柏木からの何かのメッセージなのか。そういえば以前にも、こんな夢を見た日があった。それは、クリスマスの前日。あのときは、柏木のことを想う気持ちがあふれていた。それが夢の原因だと信じて、良い意味で捉えていた。しかし、現実には悲しかった。あれは、柏木が最後に見せた幻想だったのか？　だとするならば、あの真意は……警告。今日、柏木が現れた理由も、警告？　俺の身にも、何か訪れるというのか？……わかっていて、そんなこと。連中は、何もお前をいじめようとしたわけではないはずだ。俺を、俺を標的にしていたからこそ、お前が被害を受けることになった。まあ、お前が死ぬとまでは思っていない。……とりあえず、わかったよ。ありがとう。俺は、負けないから。絶対に、勝って見せるから。お前の無念、必ず晴らしてみせるから。

日記の最後のページに、「警告」と二文字を書き込んでから、学校へと出発した。本当は夢の内容を、脚色してでも詳しく描写するつもりでいたが、もう柏木に会えないことを、痛いほど理解していたから、書きたくとも書けなかった。夢から本当に目覚めるためには、「警告」として胸に秘める他ないと思った。これは俺の、精一杯の強がり？　もしかしたらそうなのかもしれない。柏木が見たら、何ていうだろうか。本当の俺を知っている奴にしか、その答えは知らないだろう。

俺は、本当の俺がわからない。しかもう、この世に知る機会は存在しない。

1 - 8 サイカイ

今日も花瓶はない。鈴森は、静かに読書をしている。俺へと注がれる無の視線に変わりはないが、それはそれでいい。連中が何も行動を起こさぬまま時間が経過するなら、俺に直接被害が及ぶことはない。柏木の件で、俺が落ち込んだと思っているのだろうか。もう、仕打ちは終わったのだろうか。

演技でもいい。このままおとなしくし続けることが、俺の身を守る盾となり、反撃のチャンスをつかがう城の形成にもつながる。

一限、国語。ホームルームは副担任が来たため、この授業が、柏木の葬式以来初めて杉原と会う時間となる。奴は、周りに誰がいようと気にしないタイプ。何か言われるのではないかと内心不安だ。別に、俺が逃げ出したなんて、表面的なことだけならいい。下手に、鈴森に唆されて、俺が犯人だなんて言い出したらおしまいだ。教師の間では、俺は「問題児」として認識されている。以前の「死にたい」という教育相談にはじまり、この学校の空気がとにかく肌に合わない。そんな態度を取り続けてきたためだ。仮に、俺が誰かに暴力を振るわれようと、この学校はその事実を闇に葬ってしまう。そんな場所だ。だから監獄なんだ。

しかし、それはすべて杞憂に終わる。普通に授業が始まり、特に俺が標的にされることもなく時間が過ぎていく。ただその三十分後、珍しい時間帯に放送が流れた。

「――授業中失礼します。杉原先生、杉原先生、至急、職員室へお戻りください」

杉原は一瞬表情を曇らせたが、チョークを置き、小走りで教室から出て行った。声の無くなった教室は、何か、不思議な雰囲気が漂う。別に、寝ていたわけではないのだが、脳裏に浮かぶ、柏木の笑顔。そしてそれは、警告に違いないことを思い出す。

「――えー、コガラシ、木枯虚羽、至急……。……………」

この適當さは、間違いなく杉原。嫌な予感、そして、連中の嫌な視線。仕方なく俺は席を立ち、ゆっくりと廊下を歩きだした。それは、学校への反抗としての行動なのか、それとも、これから起こるであろう未来に、躊躇っているかのどちらかだ。

放送だけでは、正直どこに行くのかわからなかったが、とりあえず職員室まで行けばどうかなるだろう。階段を下り、ゆっくりと進む。変に緊張しているせいで、膝が少し震えている。

「……失礼します」

最低限のマナーは守る。無駄に、これ以上敵を増やすわけにはいかない。ただ、いつもいる席に、杉原の姿はない。俺を呼んでおいで、といったい何をしているのだろうか。というか、ここ以外のどこに行った？……来客か何かか？ だとすれば……。

「コガラシくん？」

「……はい」

しまった、反射的に返事を……。背後に立つのは杉原ではない。その大柄な体格は見覚えがある。昨日の男……いや、PTA会長、鈴森堅志……！ 嫌な予感が的中した。

昨晚、色んなところから資料をかき集め、おぼろげながらも頭にあった顔を探しまくった。そして、俺が一番警戒しなければならぬ奴だと気づいた。鈴森という苗字、これは偶然でも何でもない。あの、鈴森みゆの父親だ。さらに悪いことに、その職業は――

「深林警察署の鈴森です。あなたに、少しお話があります。応接室まで来ていただけますか？」

テレビ等で見たものと同じ、警察手帳というものが目の前にある。別に、今更驚いたりしなかった。当然、小学生のように、テンションがあがることもなかった。

「……はい」

従うしかない。他に、選択肢は無い。しかし、これはチャンスではないのか？ おそらく、こいつは柏木の死の真相を暴こうとしている。俺のところに話がまわってくることは、正直昨日から予想で

きていたことだ。ここで鈴森を中心とする包囲網の存在を明かせば……いや、証拠がない。何の根拠もなく言葉を積み重ねてしまえば、逆に俺への疑いが強くなる。いや、疑われるどころか、「こいつの娘が犯人だ！」なんて、言ったあとどうなるかわかったもんじやない。

何も取り繕う必要はない。ただ、自然体で質問に答えればいい。仮に、俺が疑われる場面に遭遇したとしても、一言、ノーと伝えればいい。たとえ嘘発見器にかけられようとも、絶対に確たる証拠はうまれない。俺は、俺が無実だということを、頑なに信じているからだ。

応接室に着く。目の前の席には、杉原が座っていた。テーブルの上にあるお茶を飲み、とてもリラックスしているようだ。……何だよ、こいつ。

「コガラシくんも、座ってください。すぐに終わりますから」

「……はい」

波を立てないように、ここでは真面目君を演じたい。しかし、杉原がいるために、あまり従順でいるわけにもいかない。昨日のことを考えると、杉原は鈴森とのつながりが、俺が思うよりも強い可能性が高い。さっきの授業は大丈夫だったが、もしも本当に唆されているとしたら、俺を犯人に仕立て上げるとも限らない。——と、思案をめぐらし始めたとき、杉原はサッと立ち上がり、鈴森に軽く頭を下げた。

「——それでは、あとはよろしくお願いします」

「っ」

俺の表情の変化を、杉原は見逃さなかったはずだ。しかし、何をするわけでもなく立ち去っていった。部屋から出る際、少し笑っていたような気がするが……あれは、俺の揺らぐ心が見せた、幻想だったのだろうか。

俺が立ち尽くしている間にもう、鈴森は席に着いていた。俺は対面に腰を下ろす。横に座ると、顔を合わせるのを避けていると疑わ

れるためだ。少し、考えすぎであろうか。もしかすると心の中で、俺は俺が犯人であることを感じているのかもしれない。無意識に隠そうとしているのかもしれない。

鈴森はお茶をすすると、神妙な顔つきで話し始めた。俺も同じようにスイッチを切り替えようと思ったが、俺の前にはお茶がない。空の湯飲みだけがそこにある。当然、杉原が一服していたためだ。

……駄目だ、自由すぎてあいつの行動は読めない。

「——もう、どうして呼ばれたかはわかりますよね」

何オクターブ下げたのだろう。一気に雰囲気が重くなるのを感じた。

「柏木なつめさんの件ですね。理解しています。それで、私は何を証言すればいいんですか？」

驚くほど落ち着いていた。こういった空気の方が、逆に俺には馴染むらしい。ただ、自分でしたこととはいえ、「私」という一人称は変な感じがする。

「わかっていているなら話は早い。まずはこれを。詳しいことは、内容を頭に入れてからの方がいい」

鈴森は鞆からファイルを取り出すと、多くの書類の中から手紙を引き抜き、俺の前へ突き出した。俺には、それが何かわかっていなかったが、まだ、読む勇気が湧いていなかった。

「……これは？」

「質問は読んでから……そう言ったじゃないですか。昨日うちの捜査員が見つけた、柏木なつめさんの遺書です。あなたなら予想できたでしょう？」

こいつ、俺の下調べでもしているのか？ やけに俺を評価しつつ話を進めていく。これで、俺が揺らぐとでも？ 何か、平静を保てずにこぼしてしまうとでも？ 情報が抜けるとしたら、杉原からか。奴は、俺で遊びたいだけなんじゃないのか？ 本当、俺を疑うのは勝手だが、度を過ぎた遊びは、説教だけじゃ済まさない。済ますわけには、いかない。

鈴森の視線が痛い。早く読めということか。——柏木の言葉、柏木の思い、遠い昔に忘れた感情が、再び舞い戻ってくる。実際には、一ヶ月ほど前の話に過ぎないのに、この一ヶ月はとてつもなく長く感じた。楽しい時間は短く、辛い時間は長い。人間の感性はそのようなものだ。

俺には、すべてを受け止める義務がある。逃げる権利は、存在しない。そんな自己暗示をかける必要もなかった。もう一度柏木に会える喜びが脳内を支配し、読まないという選択肢は、瞬く間に消え去ってしまったのだ。

綺麗に三つ折りにされた、白い手紙。柏木の清楚さと几帳面な部分が見て取れる。懐かしい、本当に、懐かしい。俺は手紙を開き、一字一句逃さぬ気持ちで読み始めた。

1 - 9 ハンニン

『この手紙をあなたが目にしているとき、おそらくもう、私はこの世にいないでしょう』

いきなり、予想通りの超定型文だった。ただその文章は、ありふれたミステリーで使い古された表現だからこそそう感じるもの。実際に目にし、言葉を真正面から受け止めるのなら、これほどダイレクトに伝わる書き出しはないだろう。

『誰が、最初に見つけてくれたのかはわかりません。お母さん？ お父さん？ それとも、私の知らない誰か、ですか？ そんなの、正直どうでもいい。誰でもいいから、私の最後の言葉を受け取ってください。周りの人へ伝えてください。そして二度と、私のような死者が出ない世界を、創りあげてください。』

私は、自殺なんて違う世界の出来事だと思っていました。でも、違うんですね。私の中にも、自殺願望はあったんです。そして、それはついに、現実のものとなりました。

私が決意したあと、一番悩んだのは、死に方でした。どうすれば楽に死ねるのか、授業中も登下校中も、ずっとずっと考えていました。そして至った結論が、睡眠薬でした。私の心が安らぐ時間は、この世に睡眠時間しかありません。人と関わる時間は嫌いだし、だからといって一人ぼっちでいる時間も辛いのです。何も考えなくていい、体も脳も精神もすり減らすことのない安息の時間、それは眠っている間だけなのです。一番楽な状態で、楽に逝きたい。そう考えると、それしか思いつきませんでした。

薬は、当然正規ルートで手に入れたものです。私はもともと、不眠症を患っていました。そのため、定期的に通院し、薬を処方してもらっていたのです。私はその薬を使わずに保存し、数ヶ月かけて、

大量の睡眠薬を手にしました。偶然にも、服用しないせいで私の体調が悪化し、三週間前から少し強めの薬に変わったのは、嬉しい誤算でした。

あれ、私としたことが、ただの自殺マニュアルになってしまいましたね。行動より、心理の方を書かないと、冒頭の意味がなくなっ
てしまいますね』

軽い。第一印象はそんな感じだ。たしかに、俺の知る柏木とは重なる部分もある。不眠症は、極度の人間不信のためで、その話は本人の口から聞いている。当然、その原因は連中にある。ただ、このあまりにもわざとらしい文章は、あの柏木からは考えられない。死んだことを証明するはずの手紙なのに、逆に生きているということに確信を持ってしまいそうだ。しかし、それでは何故こんな不可解な手紙を？

柏木自身のもの……筆跡からはそうとれるが、「書いた」ではなく「書かされた」とも考えられる。ここまでで推理するならば、どう考えても鈴森みゆが関与していることになる。葬儀の前に奴が口にした「計画」は、このことか？ 杉原が遅れてきた理由は、まさか、警察が来る前に遺書を偽装すること……？ まだ、結論を出すには早いか。一応、最後まで読み進めてみる。

『最近、私の周りに、楽しいことなんて全然無かったんです。夢も希望もない未来。このまま、ただ過ぎ去っていく時間に、悪化し続ける環境……本当に、絶望しました。それよりも、この前ある小説で読んだ世界、そう、死後の世界での生活の方がよっぽど楽しそうでした。そのせいでしょうか、この自殺の準備が、たまらなく楽しく感じました。大きな目標に向かって準備を進める……私は、あまり率先して参加したことはありませんが、普通の中学生が思う、文化祭の準備みたいなと同じ感覚なのではないでしょうか。

でもそれだと、実行するときがつまらなくなるパターンになって

しまいます。よく言いますよね、祭りは、当日より準備の方が楽しいと。本当に、最後にその感覚が味わえて良かったです。そういえば、周りに悟られないように行動する、これも面白い部分でした。こんなの、バレたら確実に止められる。さすがに、それくらいは理解していましたから。

何故私が死んだのか、誰か、真相に行き着くことはできましたか？ 多分、突然「死」というワードを耳にし、戸惑っている方が大多数でしょう。最近、私より小さな子の自殺事件を、よくテレビで見ます。そして、すべてがうやむやのまま、終わっています。子どもの死なんて、所詮、大人からすればどうでもいいことなのでしょう。死んだ当初は騒ぐものの、たった数ヶ月で放置です。子どもでも大人でも、自殺でも他殺でも、人が死ぬためにはそれ相応の理由があります。人の世で起こるすべての事象は、必ず何らかの形で人が関与しているはずです。その人物を、突き止めることに本気になつてください。私の死も、周りにキーとなる人物が存在しています。そして飄々と、生きています。

この手紙は、おそらく事件解決の大きな手がかり……もしくは証拠として、扱われることは目に見えています。故に、ここで私を死へ追いやった人物——洗脳の殺人犯を、挙げておきたいと思います。私の死の原因は、所謂「精神的孤独感」というもの。決して暴力ではありません。ただ居場所を失い、真綿で首を絞められるかのごとく、じわじわと死の道を歩まされたのです。

当初、犯人は複数だと思っていました。しかし、現実とは違うようです。このことに気づいたのは、私が死ぬであろう日の前日。金曜日のことです。私は、奴を許さない。他人の不幸は蜜の味、なんて言葉がありますが、それを本当に実践するような奴が……あんなにも狡猾にやり遂げる奴がこの世にいるなんて、思ってもいませんでした。いつか、必ず殺します。私はここで死にますが、奴は、決して楽に死なせはしません。永遠の苦しみを、与えてやります。

この世界は、私にとって都合が悪すぎた。私のチカラでは、世界

を変えることなんてできやなかった。ただ……一人だけ、その創始者に値する人物は、たしかに存在している。そのチカラを前に、私は、「生」を諦めた。

奴、そう――」

「ここで、終わりですか」

下四分の一がちぎられた手紙を手に、問いかける。

「はい、結局、誰のことを言いたいのかわからないのです」

いや、わかるだろ。……でも、言えない。

鈴森は淡々と答えた。俺は思案を巡らすこともなく鈴森みゆの顔が浮かぶのだが、それは思い込みに過ぎない。自分でもわかってい
る、あの涙が、本物であったことを。それ以前に、ここで俺が名前
を出したとしても、証拠がなければ意味がないのだ。

「それで？ 何か、他に話があるんじゃないかなかったですか？」

「ええ。それよりもまず、この手紙についての感想をお聞きたい」
 確信……それに近いものは感じていた。最後の方は、まるで言いたいことがわからない。殺したいほど憎んでいる。それなのに死ななければならぬ理由がどこにある？ 自殺の原因は結局何だったのか……文面からは、「社会への報復」としかとれないじゃないか。この学校で、愛しい人を自殺で失った。そんな奴なら、こういった形で告発することもできるだろう。しかし、少なくともこの学校、そしてこの近辺の学校を見渡しても、周りの人が苦汁をなめるような経験を強いられた事件は聞いたことがない。これは、できもしない自殺を楽しむ馬鹿が書いた、単なるエンターテインメントに過ぎない。

しかし……最後の一文だけは、何か……その前とは違う「ナニカ」を孕んでいた。言い方を変えたとすれば、そこだけは異様に柏木らしさが際立っていたのだ。そこを隠すために、それ以前の文章が存在しているように思えて仕方がないのだ。

「……字体は間違いなく柏木さんのものですし、文体も、私の知っている通りのものです。ただ、これだけでは、彼女の言う犯人にはたどり着けません。子どもに対してなのか、大人——先生や親族に對してなのか、はたまた社会を相手にしているのか、まったく特定することはできません」

ただ、連中が意味もないことをするとは思えない。きっと、まだ何重かに渡った罠が仕掛けられている。まずは様子見から。……無難に、文面から読み取れることだけを口にする。鈴森は、はつはと肩を揺らして笑っていた。その雰囲気を変えようとしたのか、小さく下を向き、再び顔をあげる。その目には、もう笑顔はない。それどころか、俺……いや、俺を透かして何かを見ている。思わず目を

背けなくなつたが、退くわけにはいかない。

警告。彼女の示す運命は、俺の思い通りには進んでいない。だからこそ、俺は抗わなければならない。

「いい度胸してますねえ。予想通り……いや、予想を上回る頭のキレ」

単純に、俺の言葉だけを受け取つての発言ではない。もしそうなら、こいつはコミュニケーション能力や情報整理能力が、一般人に比べ著しく劣っていることになる。

「……どういうことでしょうか」

「まだわかりませんか。あなたなら、ここに足を踏み入れた瞬間……いや、はじめて私と会った瞬間……もしかすると、昨日、彼女の死を知った瞬間にはもう、感じていたと思います」

鈴森はニヤリと微笑む。また、さつきとは違う種類の笑い方だ。

そして、ファイルからちぎれた紙を取り出し、俺の前へと差し出す。裏返しではあるが、それが柏木の手紙と関係のあるもの……破れた部分につながるものであることは、容易に想像できた。

しかし何だ、この感覚は。こいつの発言自体は、そこまで核心を突くものではない。それなのに、脳内に直接語りかけてくるような感じを受ける。これは……テレパシー？ いや、どちらかというと、俺の脳内に初めからこいつの発言がインプットされているような……不快な、印象。表現を変えるならば、「脳の共有」だろうか。

この、俺の感情にまで入り込むものは、ノイズ？ いや、そう考えると何か違和感がある。それ以前に、そう考えるわけにはいかないんだ。これを自然なものと考えているうちは、絶対にこいつには勝てない。脳内を支配する、俺の感情すべてを疑え。そして俺の真の思い、柏木の声を信じる。

これから何が起るのか、俺は知っている。それが予言だとか幻想だとか、そんな空虚なものでないことも理解している。これは、運命。そして俺の脳内に潜むのは、運命の記憶。手紙の切れ端を表に返すと、デジャヴとも違う不思議な感覚が、俺を突き抜けていつ

た。そこには、数行上までの柏木らしさが感じられない乱雑な文字が並ぶ。たった四文字ではあるが、恨みや憎しみ、様々な思いが込められているように見える。俺は、何度も何度も眼前の現実を心に刻んだ。

「木枯虚羽」

俺は運命を呪った。それが現実になるのなら、いつそのこと、俺の記憶をすべて消し去ってやりたいと思った。鈴森は、俺の動揺を楽しむかのごとく、言葉を重ね始める。おそらく、この瞬間を心待ちにしていたに違いない。

「——コガラシくん、あなたなんですよ」

また、笑った。これも、こいつが見せるものとしては初めてのパターン。しかし、俺には見覚えがある。死神のような笑み……葬式時の鈴森と瓜二つ。

しかし、その考えは浮かばなかったな。俺か……つまり、あからさまな「死」が「生」を暗示していたように、俺が頑として「自身の無実」を証明しようとしていたことは、その逆が真だと理解していたからなのか……。人間って、怖いな。どんなに愛そうとしても、その相手の死後にその感情が湧くなんて、遅いにもほどがあるだろ？ 本当に死ぬべきなのは俺の方だ。そう、この遺書は、俺への死刑宣告——

——だと、素直に受け取る馬鹿がどこにいる？

まったく、どこのF級ファンタジーだ。

俺に柏木を動かすチカラがあったと？ 好きな奴に、脅迫じみた行為をやったのける狡猾な殺人犯とでもいうのか？

この展開には無理がありすぎる。俺は何もしていない。自分の心に嘘をついても仕方ない。本当に、これが真実。もしも、俺を本気

で疑おうとしているのならば、それは杉原が誰かに吹き込まれたデマだ。それより、俺が柏木と付き合っていたこと、ちっぽけではあるが結婚の約束までしていたこと、いつも一緒にいて、お互いがお互いを、片時も忘れない関係であったこと……そして、俺が柏木を失って、どれほど悲しんでいたのかを、こいつは知らないというのか。失礼にも程がある、ふざけるな。

鈴森は、またある書類を手に取ると、それを見ながら話を続ける。
「——これは、杉原響一郎さんから聞いた話ですが、あなたは、亡くなった柏木なつめさんとは親密な関係にあったということだ」

「はい」

何だ、知ってたのか。じゃあ、ここからどう発展させる気だ？

「あなたは、本当に愛していたのですか？ これは私の推論ですが、彼女を、利用しようとしていたのではないですか？ 彼女は、あまり友達に恵まれたタイプではなかったと聞いています。だからこそ、近づいた」

「……は？」

それを言うなら鈴森みゆだろう。俺に近づいてきたときの、あの魔女の姿。

「周りから見れば、あなたは好青年に映っていたことでしょう。彼女にしてみれば、まるで白馬の王子様。でも、それ以上に計画は練りあげられていた。あなた、あまり学校では評価が高い人物ではないそうじゃないですね。孤高の存在、みたいなものですか？ 多分、あなたも多少は辛い目にあったことがあると思います。だからこそ、より彼女に惹かれたんでしょう」

ここまで、おかしいことは言っていない。いくつか気になる部分はあるものの、俺が言葉に表しづらかった感情を、簡潔にまとめている。杉原が、ここまで優れた観察眼を持っていたとはな。

「しかし、彼女はあくまでも孤独な存在だった。孤高と孤独の違いってわかりますか？ ……簡単に言いましょう。あなたは、彼女と付き合うことに関し、いじめを受けることはほとんど無かったはずです。皆、近寄りがたい存在だったでしょうから。ただ、彼女だけは違った。交際の事実が学校に広まるにつれ、噂はよりひどいものへと姿を変える。彼女に向けられる矛は、より鋭利なものに変わっ

ていったのです。——もう、わかりますよね。あなたは、自身に向いていた矛先を、すべて彼女に押し付けた。そして、最後の仕上げ。それが、彼女の死でした」

何を言っている？ 俺が柏木を利用した？ 馬鹿な、そんなことがありえるはずが……無いと言い切れるのか？ 俺は柏木が死んだとき、どんな反応をとっていた？ 近い席であることを気にも留めず、「死」という現実を平然と受け止めた。葬式のときもそうだ。俺は、どうして逃げ出した？ 俺自身の無実を、信じきれなくなっただからだろう？

「あなたは、柏木さんを本気で愛した。彼女の心を、あなたの愛で一杯にした。嘘で塗り固められた、偽装の愛で。そして、非情にも彼女を突き放した。そのとき、彼女も悟ったのでしよう。自分が、ただ利用されていたということに。それだけで、十分に自殺の理由にはなります。」

あなたは本当に悲しみましたか？ 心の奥底では、笑っていませんか？ 自由を手に来たこと、さらに、周りの人へ、悲劇の主人公ぶりを披露できたことに、酔いしれていたんじゃないですか？

彼女の心は、生きる勇氣は、あなたと付き合う前から空前の灯火だった。最後に激しく燃やさせ、？を溶かしきってから火を消し去る。あなたも狡猾ですねえ」

俺が、殺した？ 柏木を？ あの感情は、あの記憶は、幻想だともいうのか？

「……証拠は？」

「はは、そんな推理モノお決まりの台詞を吐くなんて、だんだん鈍ってきましたねえ」

「いいから、答えろ。答えられるのなら、答えてみせろ」

「だから、何でも言ってるじゃないですか。柏木さんの手紙も読んだでしょう。あれ以上の証拠はありませんよ。これですべて辻褄が合う。事件解決です」

まだ一つだけ、こいつが触れていない部分がある。柏木との別れは、俺から発したことはない。

「何を言っている？　俺は、柏木と別れようなんて思ったことはない。それどころか、俺は柏木の父親によって彼女との交際を断ち切られた、被害者だ！」

「それも、知っていますよ。——ふふ、最後のカードも切っちゃったようですね」

俺の表情が曇るのを確認し、今度は嘲りを含んで笑う。

「どういう、ことだ？」

単純な質問しかできない。自分でも、自信が無くなっていき、心の余裕も無くなっていつているのが理解できる。

「柏木さんは、ただ、娘を守っただけなんです。あなたという、最悪の殺人犯から。結局、彼女は心の傷が癒えるのを待つ前に死んでしまいました。」

たしかあなた……クリスマスの前の日に、ずっと待ってたんですよね？」

「そうだ。それこそ、俺が柏木のことをどれだけ想っているかの——」

「証明に、なるとでも？　ふざけないでください。あなたはあの日、彼女と別れようと決意していた。しかも、それが無理なら殺すのもやむを得ないことだと思っていた」

ふいに、イヴの日の情景が頭に浮かぶ。あのとき、俺はどんな顔で柏木を待っていた？　微笑む天使の顔だったか、それとも、無表情の悪魔の顔だったか……。

「ざけんな……そんなの、ただの空想じゃねーか！　勝手なことをペラペラと……。そんなに、俺を犯人に仕立て上げてーのか！」

「仕立て上げる？　違いますねえ、これが真実なんですよ」

俺の方が取り乱している。それに比べてこいつは、異常なほど落ち着いていやがる。何だ、何だよこの雰囲気は？　まるで、俺が犯人であるかのような……。……。違う。きっと、俺は試されて

いる。もしくは、何かの罠だ。本当に仕立て上げようとしているのは、こいつではない。こいつの背に隠れ、手を汚さずに俺を始末したい。そんな思想を持つ誰かの陰謀だ。信じる、俺は、大丈夫だ。

「あなたは、心の奥で思っていたはずです。彼女が憎い……いや、正確に言うならば、彼女の才能が羨ましく、妬みに近い感情を覚えていた。成績は拮抗していたみたいですが、実際、彼女は超がつくほどの努力家で、あなたは貯金に頼った天才型。進化を続ける彼女と、退化の兆しに怯えるあなた。人の上に立つことや、人に尊敬されることを好むあなたとしては、さぞやるせない気持ちになっていたでしょう？　彼女が、自身の能力を自覚していないからこそ、余計にね。はは、本当に、あなたも不幸な性格の持ち主だ……一般的には、自分の彼女が優秀な方だなんて、誇れることなんですけどね」

俺の心に潜む、本当の俺……その存在を、俺は認めようとしなかった。しかし今は向き合わなければならぬ。言葉として存在する、望まない現実。

「……俺に、そんな自覚はない。今のはすべてフェイク、あんたの作り出した空想でしかない」

「最後の強がり……ですか？　追い詰められた犯罪者は、よくそう言うんですよ」

「違う、本当に違うと言ってるんだ！　何だ？　俺にもう一つ的人格があり……俺の知らないところで俺が柏木を恨んでいたとでもいうのか？　はっ、くだらない！」

意識がないということになれば、少しは逃れられるかと思っていた。ただ、そんなことを考える時点で、俺の負けは決まっている。

——いや、負けてはいけない。これはすべてフェイク……この、冤罪事件がメディアに注目される世の中で、絶対に起こってはならない事件が起ころうとしているんだ。ふざけるな、ふざけるなふざけるなふざけるなああああ！

「二重人格……それこそ空虚な言い訳にしかありませんよ。それに、

今、自分の言葉で証明しちゃったじゃないですか。『知らないところで俺が恨んでいた』それはつまり、自覚はないが、あなたという人間が罪を犯したことに変わりはないんです」

「何故だ！ どうしてそうなるんだ！ 俺が柏木を殺した？ 死に追い込んだ？ 嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！ おかしい……無実だ、俺は無実なんだ。疑うなら他の連中を疑え！ 鈴森や栗山や、まだまだ他にもいるだろう！ 俺よりも狡猾で、残虐な奴が、あのクラスには必ず存在する！ 疑え……連中を皆疑えよ！」

もう、俺の負けは決定的だった。自身の醜さを露呈してしまったが、それでもまだ、俺は無実だと信じている。

「疑う？ じゃあまず、あなた自身の心を疑ってみてくださいよ。

あの夜……そう、イヴの日を思い浮かべてみてください」

俺の記憶……再び浮かぶ、舞い散る雪。その表情はもう、天使だったと確信するのは困難な状態にある。彼女に連絡を取ろうともせず、ずっと待ち続けた俺。それは、彼女を信じていたからか？ それとも、ただ憎悪の念を燃やし、その瞬間を待ち続けていたからか？ もう、わからない。

それ以前の記憶……柏木への想いはどうだった？ たしかに彼女とは付き合っていた。愛し合っていた。ただ、鈴森の言っていることも真実だ。俺は心のどこかで、彼女という縛りから抜け出すことを望んでいた。しかし、俺の努力が足りないことも自覚していたし、とても、彼女を消し去ろうなんて考えには至らない。それが俺という……いや、俺であってほしい。

なぜなら、その狡猾な人格が存在しているならば、俺は鈴森たちと変わらないことになってしまう。俺が他者から疎外されることにも十分な理由があることになり、俺が連中の死を望むならば、それはつまり、自己の存在をも殺したいということに……。この方程式は、当然成り立つ。ただ、それはあくまでも仮定のストーリーであり、俺が柏木を殺したという、前提条件が成り立っていない現状では、その先はただの妄想だ。

1-12
フカシギ

「……柏木、どうして死んじゃったんだ？」

ふつとこぼしてしまふ。

「だから、あなたのせいです」

呆れたように、鈴森は答えた。

柏木……今ここにお前がいれば、こんな苦勞しなくて済むつのに。いや、ここにいるということは、まだ死んでないわけだから……苦勞も何もするわけないか。ああ、俺の思考力、著しく衰えてきやがった。

「コガラシくん……どづつて……」

一瞬のビジョン。俺の思考力が低下し、脳内の記憶が引き出され
たのだろうか。——なんて、また思考を始める。これじゃ駄目だ。

今の一瞬は、幻影に過ぎないが現実リアルに感じ、何か、心に強く響くもの。もう一度、記憶を探る。が、そんな間もなく、俺の脳裏では映画のようにシーンが巡っていく。

「っ！」

「がつ、く……はあ、はあ……」

「ん
…
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん」

「あああああああああああああああああああああ
」！

「！ どうした！ 何が……」

「柏木が、柏木が、柏木が、あああああああ！」

——俺が、柏木を殺した。俺の知らないところで、俺が殺した。柏木は睡眠薬なんかで死んだのではない。それ以外の何かを飲まされ、その作用で死んだのだ。残りわずかの命で手紙を書き、最後に例の睡眠薬を使い、少しでも楽に死のうとした。

そのすべての発端は、俺だ。自己中心的な考えで彼女を苦しめ続け、最終的に、葬り去った。柏木が自殺を決意するように事を進め、

自らの殺人を隠し通そうとした。最悪にして狡猾、やはり俺に、生きる価値なんてなかった。

「どうして……………」

「やめろ、やめろ、やめろおおおお！」

柏木の手が、闇の中から俺をつかむ。俺は礫にされたままの状態
で、何もすることができない。十字架などではなく、闇によって行
動を制限されている。闇が俺に迫り、闇が俺を包むという…………幻想
？ しかし、俺の体が動かないのも事実。薬か…………しかも、おそら
く遅行性のやつだ。

「いいじゃない。コガラシくんも、苦しもうよ。私は、もつともつ
と苦しかった」

「く…………か、かはっ……………」

「あれ、もう毒がまわっちゃったのかな？ まだまだだよ、そのま
ま逝かせはしない」

「ふ、ふざけるな…………げぼっ…………ひ、人を何だと思つてやがる…………

……………」

「よくもまあ、そんな台詞が吐けたもんだねえ。コガラシくん、あ
なたの方が先じゃない。あの日、私を襲ったときの顔は、死神その
ものだったよ。私利私欲のためにしか動けないクズが…………飄々と生
き延びているんじゃない！ 死ね！ 今すぐ死ね！ いや…………もつ
と苦しめ！ 永遠に苦しみ続ける！ あんたには、生きる価値も死
ぬ価値もない。死以上の刑罰を下さないと、私の気持ちは晴れない
んだよ……………」

「く……………」

「返す言葉も無いのかい？ くつくつく、それじゃあ行こうか、地
獄という名の楽園へ！」

「ま、待て…………待つてくれ！ 俺は、俺はまだあああああ！」

「黙れ！ ここで私の欲求を満たすまで…………永遠に拷問を受けるん
だ。死のうつつたつて無駄だよ。この世界は私が支配する。あなたを、
むざむざ殺すなんてありえない」

世界……ここには闇以外の物質は存在していない。おそらく、柏木から生まれたものだろう。だから正確に言えば、この世界は「無」ということになる。黒でもなく白でもなく、透明でもない……認識不可能な景色が広がっている。俺を磔にするこの闇が、唯一存在を確認できるものであることはたしかだが、視覚以外では感知することとできない。要は、八方ふさがりだということだ。

柏木が一步俺に近づき、悦に浸った表情を見せる。同時に、また闇が俺へと流れてくる。それはまるで、寄生虫のように俺を蝕む。耐えられない痛みではない。しかし、耐えきれぬ痛みでもない。痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

「殺せ……もう、殺してくれよ……」

「だーめ。もっと、もっと楽しむんだから」

「だったら……舌を噛み切って死んでやる」

「あつはつは、やれるもんならやってみなさいよ。あなたが、所詮口だけの男だってことはわかってるもの。あはは」

「そうかよ……じゃあ、その俺がお前の空想でしかないことを証明

――」

「一つ忠告。ここじゃ、舌を切っても死ねないわ。苦しみが、刹那的に増すだけよ。その後の永遠の苦しみには、何の影響もない」

「どうやら、俺に選択肢は存在しないらしい。死ななくとも、俺の人生……ここで終わるか。」

闇は止まらない。体が蝕まれ、精神が蝕まれ、いずれ、魂まで壊されることだろう。ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと。どこかで感覚を失うことができれば、もう、ある意味大丈夫ではあるかもしれない。ただ、体中の神経が消えつつあるこの状況下において、痛みの感覚だけはより一層鋭くなっている。死にたい、死にたい、死にたい……。

「……どう、死にたい？」

「ああ、これほどまでに死にたいと思ったのは、初めてだ」

「それが、自殺志願者の気持ち」

つまり、これが柏木の気持ちだということか。……そして認めた
くはないが、目の前にいる柏木こそ、本当の俺の姿に違いのないのだ。
「……だからと言って、俺が柏木から苦しみを受ける必要がどこに
ある？」

「は？ 私はあなたに殺されたのよ？ 復讐くらいしてもいいでし
よ」

「違う……俺じゃない。俺以外の、誰かの……」

「誰か？」

「そうだ。きっと、何かカラクリがあるんだ。俺じゃない……お前
ならわかるだろう？ 俺は、人を平気で殺すほど度胸のある人間じ
やない」

「そうね。たしかに……私の知る木枯虚羽は、あなたのいう通りの
人間よ。でも、今ここにいるのは、あなたであってあなたでない」
俺の知らない俺が、俺を苦しめ続ける。俺は、本当に何もできない
のか？

「……柏木、さっき、復讐だって言ったよな？ お前が俺を苦しめ
ようとするのなら、それは、お前が俺にされたことと同じ」

「何よ、今更」

「柏木は、俺と同じレベルの人間に成り下がっても平気なのか？」
こんな正攻法が通じるものか。しかし俺の、壊れかけの頭では、
もうこんな論理しか浮かばなくなっている。

「あはは、何その台詞。あんたも堕ちちやったもんだねえ。ここが、
そんなに嫌なの？ もう、何も考えなくていいんだよ。社会のしが
らみの中で生きなくていい。それは、あなたの望みだったんじゃない
いの？」

「だったら殺せばいい」

「何度言えばわかるの？ あなたはまだ苦しみ足りないの」

「本当は、殺すのが怖いんじゃないのか？」

「……………」

「俺の頭の中にある、お前を苦しめた瞬間の記憶。そんなものがあ

る時点で、俺は完全に疑いを晴らすことができない。だが、俺はそのビジョンが流れるとき、とてつもない嫌悪感を抱く。それだけが俺の知らない俺の存在を裏付ける、証拠だ。お前も、俺と同じ…… 柏木の知らない柏木によって、今の柏木は支配されている。元的人格と共存しているわけだから、お前は俺を殺さない。いや、殺せないんだ」

この期に及んで、まだ俺は俺の無実を証明しようともがいている。そして、柏木が……あの優しかった柏木に戻ってくれることを祈る。「何を言っている？ 私は、今すぐにでもあなたを殺せる。この闇すべてを流し込めば、一瞬で貴様は無と化すの」

「だつたらやってみろ！ さあ、今すぐにだ！ どうした、殺せないのか！？」

柏木の動きが止まり、闇が彼女の元へ戻っていく。俺を磔にしている、最小限の闇だけが残り、それ以外はすべて柏木の体へと入った。ただ見た目には、柏木が苦しんでいるようには見えない。耐性があるのだろうか。

「……あはは、よくまあ、そんなに喋る元気があったもんだ……」
「柏木？」

見上げたその顔、見開いたその目にはもう、つけ入る隙はどこにもなかった。

「サヨウナラ」

無情な声が、ポツリと闇の中へ消えた。それが拷問の始まる合図であつたと、理解する間もなく、俺は、食われ始めた。

「がっ……ぐ……あああああああああああああああああ
！？」

「あっははは、痛いかな？ 苦しいかな？ もうすぐ死ぬるよ……貴様の望んだ、死がやってくるよ……まあ、永遠の、先にだけど。くくく」

感覚が、消えていく。もう、俺の両足は闇に散った。しかし、痛みだけは足があつたとされる場所ですますひどいものとなる。

「ああ……ああああ……ああああああ……」

ただ、言葉が流れ続ける。叫ぶ気力も、もうじき無くなってしま
うことを悟った。

「な……っ……め……くっ……」

首から下は、もう闇の餌食となっている。次は、脳。精神を食い
荒らすだろう。俺が、記憶を守ろうとしたのか、それとも、痛みを
忘れるため藁にもすがる思いで走ったのかはわからない。しかし、
俺の脳裏には、たしかに柏木……いや、なつめの姿が映し出されて
いた。——この呼び方は、封印したはずなのに。

「何だ、何の真似だ？」

闇が、止まる。だがもう、世界は真っ暗。痛みにはもう慣れた。
夢の中にいるような不思議な感覚。よく、人は辛いとき、幸せだっ
た過去を振り返るといふ。そんなふうに、逃げるから前に進めない
んだと、俺は周りの連中を軽蔑してきた。でも、俺もやっぱり人間
だよ。あいつらと、同じレベルの人間だよ。くそ、どうして、どう
して……

「なつめの顔が、思い出ばかりが、出てくるんだよ……」

「……？ 何を考えている？」

誰、誰なんだよ、そこにいるの。わかんねーよ、もう何も、わか
んねーよ。

「俺……幸せだった。俺は、俺のことが死ぬほど嫌いだった……
なつめは、そんな俺を好きだと言ってくれた。嬉しかった」

「そのなつめさんと、まさかこんな形で再会することになるとはね
え！ あはははっ」

だから、誰だって。……なつめ？ いや、俺の知るなつめは、闇
なんか扱えねーって。むしろ、光をまとう天使だったの。何だよ、
こいつ。人の記憶旅行、邪魔しやがって。

「っ」

瞬間的に脳に激痛が走り、気がつくと、俺はどこかの知らない世界にいた。何か、視覚以外では感知できない物質——そう、闇によって礫にされている。デジャヴを感じたが、おそらく、気のせい。こんな非日常な空間、経験があるはずはない。

眼前に広がる殺風景の中に、一人だけ、少女が佇んでいる。彼女は俺の方を見ると、不敵に、笑った。

「地獄を、見せてあげる」

俺は、闇に食い荒らされた。ところどころ、いや、まったく記憶が無いために、状況を理解することができないのだが、一つ、わかったことがある。

「俺は、死ぬべき人間なんだ……」

彼女は、俺に課せられた刑罰を「永遠の苦しみ」と呼んだ。しかし、実際にはそれは一瞬のものであって、俺は俺の望むように、闇によって命を失った。

「——あら、おはよう。やっと、目、覚めたね」

「お……おはよう？」

「体力的な疲れは出ないはずんだけどなあ、記憶もリセットしてはるはずだし」

訳のわからないことを言う。何だ、こいつ。

「さっきので……えっと、九十九か」

とても軽やかな声で、笑顔を振りまく彼女。正直可愛い子ではあるが、この状況下においては、純粹に彼女に会えた喜びを、表現している暇は無い。

「さーで、それじゃ記念すべき百回目は……」

彼女は俺に近づくと、人差し指の先で俺の額に触れた。何故かはわからないが、笑いを抑えているように見える。こういう顔を見る

視界も、記憶も、思考力も、すべてが、黒に染まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4316r/>

俺にメガミは微笑まない

2011年3月9日20時55分発行